病-病連携による地域での感染対策

～ 地域のアンチバイオグラムの作成とその効果 ～

山下雄介[1)]　中根丈晴[1)]　関口浩之[1)]　田島寛之[1)]　木暮智春[1)]　橋本千聖[1)]

江熊広海[2)]　美原盤[3)]

1)公益財団法人脳血管研究所美原記念病院　薬剤部

2)公益財団法人脳血管研究所美原記念病院　院内感染防止対策委員会委員長

3)公益財団法人脳血管研究所美原記念病院　院長

[はじめに] 当院は平成24年度より感染防止対策加算2を算定しており、地域における多施設共同カンファレンスに参加している。そこで市内5病院の感染症状況を検討し、地域のアンチバイオグラムを作成した。その結果、尿路感染症におけるレボフロキサシン（LVFX）の感受性率が低下していることが判明し、尿路感染症に対する第1選択薬としてパンスポリン（CTM）の使用促進が提言された。これを受け、当院では院内感染防止対策委員会と協力して薬剤部が対応したので報告する。

[方法]全常勤医が参加する定例会議において、地域のアンチバイオグラムと共同カンファレンスの提言について説明した。実際の臨床においては、尿路感染症に対してLVFXが処方された場合には担当医に対し個別に疑義照会を行い、代替薬を提案した。介入前(2013年5月～7月)、および介入後(2013年8月～10月)において①尿路感染症の件数、②LVFXの使用量、③CTMの使用量について調査した。

[結果] 介入前は①36件、②15件（41.7%）、③3件（13.9%）、介入後は①25件、②3件（12.0%）、③13件（52.0%）であり、尿路感染症に対しLVFXが処方された患者の割合は減少し、CTMの使用が増加した。

[考察]薬剤師の介入により、抗菌薬の適正使用が推進された。病-病連携による地域での感染対策の取り組みは、医療の質の向上に有意義と思われた。